

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02570

研究課題名(和文) 現代社会における古い ジョン・アップダイクと「古い」の表象

研究課題名(英文) Aging in Modern Society: Representations of "Aging" in John Updike's Works

研究代表者

柏原 和子 (Kashihara, Kazuko)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：90330216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアメリカの現代作家ジョン・アップダイクの作品における「古い」の表象を分析することにより、現代社会における「古い」への対処の仕方を考察したものである。前半は女性の老いについて、後半は最晩年の老いについて研究した。主人公たちは自分の遺伝子が子孫に受け継がれ自分が生命のリンクとして自然の営みに関わっているという認識を持つことで自分の存在意義を確立し老いの苦境を克服、死の恐怖を緩和することができた。「古い」に関して特に男女の性差は見られず、最晩年の作品からは、神の創造物であるこの世のすべてを受容するという世界観に従い、生も死も良きものとして受け容れた作家の姿がうかがえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢化が進む現代社会において自らの「古い」や死への向き合い方は洋の東西を問わず我々現代人の課題となっている。現代アメリカ文学を代表する作家の一人であり半世紀以上にわたって市民の生活を描き続けたジョン・アップダイクの作品における「古い」の表象を明らかにすることで、同じような現代社会に生きる我々日本人にも参考になる老いへの対処法を提示できた。

人は自分の存在意義を確立することで「古い」の苦境を克服し死の恐怖を緩和することができる。そして自分の遺伝子が子孫を通じて永遠の生命の連鎖の一部として生きながらえるとの認識は自らの存在意義の確立に大いに助けとなる。

研究成果の概要(英文)：This study has explored coping with "aging" in modern society by analyzing depictions of "aging" in John Updike's works. First, the study examined "women's aging," and then "aging at the very end of his life." Updike's protagonists overcome the plight of their old age and mitigate the fear of death by establishing the significance of their existence, recognizing that their genes are perpetuated through their descendants, and that producing offspring makes them a link in the endless chain of life. There are no significant differences in views of aging between the sexes. Some of his last works demonstrate that Updike accepts both life and death as good, in accordance with his world view that we should accept everything that God created.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ジョン・アップダイク 老い 死生観

1. 研究開始当初の背景

日本やアメリカを含む先進諸国において、社会の高齢化が顕著になり始めてから久しい年月が経つ。それに伴い、ジェロントロジー（老年学）やエイジング・スタディーズという学問分野が生まれ研究が進みつつある。アメリカにおいてジェロントロジーの研究は、平均寿命が延び高齢化現象が顕在化してきた 1970 年代頃に始まった。現代の発達した資本主義社会においては生産および消費能力により人の価値が量られる。したがって社会における生産活動から引退した高齢者はこの社会の中心的評価基準である生産・消費活動に従事する能力が乏しいという理由で、社会的価値が著しく低下させられ、とてつもなく複雑な苦境に陥る。アメリカ社会は 1830 年代から南北戦争のころに、革命的な社会的変化を経験した。科学の出現が知識の源を年長者の経験と知恵から科学的知識へとシフトさせ、人々は年長者の知恵に頼らなくなった。科学的思考法は若者の領域であり、新しい教育の産物であった。工業化と近代的工場システムが年長者の経験の価値を低下させ、代わりに若者の強さ、スタミナ、機敏さに価値が置かれるようになり、「ユース・カルト（若さ崇拜）」が定着していく。19 世紀の終わりごろ、多くの職業で定年退職が実施されるようになるとアメリカの高齢者の社会的地位は著しく低下してしまった。20 世紀に入り、近代産業がますます発達し、テクノロジー主導の経済社会が完成すると、高齢者の居場所はさらになくなることになった。この状況は 21 世紀の現在まで続いていると思われる。「ジェロントフォビア（老齡恐怖症）」という言葉も生まれるほどアメリカ人は若さに固執するが、これは年を重ねることに対し、価値を見出さない現代アメリカ社会の価値観とつながる[参考文献 1, 2, 3]。

1980 年代になるとフェミニスト批評家たちがジェンダー・スタディーズを補完する形で、「性」のみならず「老い」もまた、社会的産物と捉えるエイジング・スタディーズを始めるようになり、「老い」とは人が誰でも自然に到達する状態ではなく、社会や文化の中でイデオロギックな影響を受けながら構築されるものであると定義するに至った。1990 年代には文学における「老い」の問題が注目されるようになり、1993 年に刊行された *Ageing and Gender in Literature* は文学におけるエイジング・スタディーズの基礎を築くことになった[参考文献 4]。

本研究代表者柏原和子は 2008 年に開催された日本アメリカ文学学会関西支部第 52 回大会において、フォーラム「アメリカ文学における『老い』の諸相」で講師の一人としてジョン・アップダイクの描く「老い」について研究発表を行った。さらにこのフォーラムの講師 4 人がこのテーマをさらに発展させるべく、2009 年に「アメリカ文学と『老い』の政治学」の研究課題で科研プロジェクト基盤研究(C)に応募し採択された。2010 年にはアメリカのペンシルヴェニア州レディングで開催された The First Biennial John Updike Society Conference において“Accepting Aging in an Ageist Society: ‘Aging’ in John Updike’s Fiction from Rabbit, Run to the Later Short Stories”のタイトルで口頭発表を行った。このプロジェクトの成果は 2012 年に共著『アメリカ文学における「老い」の政治学』として発表された[参考文献 5]。さらに 2010 年のアメリカでの口頭発表の原稿を大幅に加筆・修正した英語による論文が、2014 年発行の The John Updike Review に掲載された[参考文献 6]。また応募者は 2014 年にアップダイクの最後の小説 *The Widows of Eastwick* における「老い」の表象を分析した論文を大学紀要に発表し[参考文献 7]、同年 10 月、Third Biennial John Updike Society Conference においてその内容を英語で口頭発表した。

アメリカ文学における「老い」の研究はまだ十分な成果を上げているとは言い難い状況にある。本研究の対象とする作家ジョン・アップダイクに関しても数多くの批評所や論文が毎年、発表されているにもかかわらず、「老い」を主要テーマとして論じたものはほとんど見当たらない。一方、アメリカのみならず、少子高齢化が加速する日本においても「老い」への関心はますます高まりつつあり、エイジング・スタディーズへの社会的ニーズは明らかである。

2. 研究の目的

本研究は平成 22～24 年度に科学研究費補助金基盤研究(C)「アメリカ文学と『老い』の政治学」において研究分担者として行った研究をさらに発展させ、現代社会における「老い」の問題を深く考察するものである。20 世紀全般にわたり、複数のアメリカ文学者を研究対象とした前回のプロジェクトに対し、2009 年に病没したばかりで、まさに我々と同じ現代社会の中で「老い」や死と向き合ったジョン・アップダイク一人を対象を特化し、より幅広い作品を研究対象とし、1970 年代のジェロントロジーや 1980 年代以降のエイジング・スタディーズの観点から分析することによって、作家の「老い」や死への恐怖の克服、またその裏にある彼の世界観を明らかにし、現代社会における「老い」や死への対処を考察する。

前回のプロジェクトにおける研究が、アップダイクの「老い」の観念および死生観の、年代による変遷に重点を置いたのに対し、今回は最晩年に到達した、作家の「老い」観、死生観に焦点

を当てる。また女性の「老い」の表象の分析をさらに進め、「老い」の性差を考察することも目的とする。

3. 研究の方法

ジョン・アップダイクの文学の特徴は、都市郊外に住む一般的なアメリカ人の生き方を時代とのかかわりの中で描いたことであり、人間の生き方を描くと同時に、現代のアメリカそのものをも描出した作家であると言える。この作家の作品における「老い」の表象を研究することにより、現代アメリカ社会における「老い」のみならず、アメリカと似たような、高齢化が進む、高度に科学技術の発達した資本主義・物質主義社会である現代日本社会における「老い」をも考察することが可能となる。

今回のプロジェクトでは研究期間を2つに分け、前半はアップダイク作品における女性の老いの表象、後半は作家の最晩年の作品における老いの表象の研究に充てた。まず平成29年度は8月にハーバード大学のホートン・ライブラリーにあるアップダイクのアーカイブを利用して、作家の「老い」観に関する資料収集を行った。また12月には東京の国立国会図書館にて、主に社会学分野での日米社会における女性の「老い」に関する資料を収集した。またアメリカにおける最近の「老い」の研究動向を知るために社会学分野での洋書文献を購入して参考にした。その後、収集した資料を基に、春期休暇中にアップダイクの晩年の女性主人公を擁した2作品 *Seek My Face* (2002) と *The Widows of Eastwick* (2009) を取り上げた論文の執筆に取り掛かった。

平成30年度は6月にセルビアのベオグラード大学で開催された The 5th Biennial Conference of the John Updike Society にてジョン・アップダイクの晩年の作品における「女性の老い」をテーマに “Establishing a Self: Women’s Productive Aging in *Seek My Face* and *The Widows of Eastwick*” のタイトルで口頭発表を行った。発表後に各国のアップダイク研究者たちから寄せられた質問やコメントを基に原稿を修正し、さらに作家の女性観や女性の描き方の変遷を世界観の確立と合わせて論じた部分を加筆して執筆した論文「ジョン・アップダイクが描く女性の『老い』 *Seek My Face* と *The Widows of Eastwick* を中心に」を大学の紀要に発表した[参考文献8]。

令和元年度は執筆依頼があったこともあり、ジョン・アップダイクと同時代の作家ソール・ペローとの比較により、作家の「老い」に対する考え方に大きくかわる世界観に関する論文「ソール・ペローの“修復”とジョン・アップダイクの“受容” 『サムラー氏の惑星』と『帰ってきたウサギ』を中心に」を執筆し、日本ソール・ペロー協会編『ソール・ペローともう一人の作家』に収録された[参考文献9]。春期休暇中に再度、ハーバード大学のホートン・ライブラリーへ資料収集に行く予定であったが、新型コロナウイルス由来の渡航制限のため、行くことができなかった。またアップダイク最晩年の「老い」についての研究が遅れていたため、1年間期間延長を申し出て許可された。

令和2年度は新型コロナウイルス感染対策のオンライン授業への対応に翻弄された1年であった。10月に予定されていたアップダイク学会の国際会議も延期となり、また渡米がかなわなかったため、資料収集ができず、入手可能な二次資料で我慢せざるを得なかったのは非常に残念であった。年度末の春期休暇に入ってようやく滞っていた研究に手を付けることができ、本研究の最後の締めくりとなる、ジョン・アップダイクの最晩年の「老い」に関する論文を書き始めることができた。

令和3年度は再度、期間延長が認められ、本研究の最終年度となった。前年度末から書き始めた論文「死を目前にした作家の心象風景 ジョン・アップダイクの *Endpoint*」を完成させて大学の紀要に投稿し掲載された[参考文献10]。これをもって今回のプロジェクト「現代社会における老い ジョン・アップダイクと「老い」の表象」を締めくくることができた。前年度から延期されたアップダイク学会の国際会議は10月に開催されたがコロナ禍の渡航制限等で参加は叶わなかった。予定していた発表原稿は時機を見て加筆修正して論文にし、学会誌に投稿するつもりである。

4. 研究成果

本研究はアメリカの現代作家ジョン・アップダイクの作品における「老い」の表象を分析することにより、現代社会における「老い」への対処の仕方を考察したものである。前半は女性の老いについて、後半は最晩年の老いについて研究した。主人公たちは自分の遺伝子が子孫に受け継がれ自分が生命のリンクとして自然の営みに関わっているという認識を持つことで自分の存在意義を確立し老いの苦境を克服、死の恐怖を緩和することができた。「老い」に関して特に男女の性差は見られず、最晩年の作品からは、神の創造物であるこの世のすべてを受容するという世界観に従い、生も死も良きものとして受け容れた作家の姿がうかがえる。

高齢化が進む現代社会において自らの「老い」や死への向き合い方は洋の東西を問わず我々現代人の課題となっている。現代アメリカ文学を代表する作家の一人であり半世紀以上にわたって市民の生活を描き続けたジョン・アップダイクの作品における「老い」の表象を明らかにする

ことで、同じような現代社会に生きる我々日本人にも参考になる老いへの対処法を提示できた。人は自分の存在意義を確立することで「老い」の苦境を克服し死の恐怖を緩和することができる。そして自分の遺伝子が子孫を通じて永遠の生命の連鎖の一部として生きながらえるとの認識は自らの存在意義の確立に大いに助けとなる。

参考文献

- [1] Conner, Karen A. *Aging America: Issues Facing an Aging Society*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1992.
- [2] Fischer, David Hackett. *Growing Old in America*. New York: Oxford UP, 1977.
- [3] Stannard, David E. "Growing Up and Growing Old: Dilemmas of Aging in Bureaucratic America." *Aging and the Elderly: Humanistic Perspectives in Gerontology*. Ed. Stuart F. Spicker et al. Atlantic Highlands, NJ: Humanities Press, 1978.
- [4] Wyatt-Brown, Anne M. and Janice Rosen (ed.). *Aging and Gender in Literature*. Charlottesville: UP of Virginia, 1993.
- [5] 金澤哲編著、『アメリカ文学における「老い」の政治学』、松籟社、2012年。
- [6] Kashihara, Kazuko. " ' It Isn ' t So Bad ' : Acceptance of Aging in Updike ' s Fiction. " *The John Updike Review*, Vol. 3, No. 1, Spring 2014.
- [7] 柏原和子、「*The Widows of Eastwick* 老いの苦境を超克する物語」、『関西外国語大学研究論集』第100号、2014年、39 - 55。
- [8] 柏原和子、「ジョン・アップダイクが描く女性の「老い」 *Seek My Face*と*The Widows of Eastwick*を中心に」、『関西外国語大学研究論集』第109号、2019年、269-285。
- [9] 柏原和子、「ソール・ペローの“修復”とジョン・アップダイクの“受容” 『サムラー氏の惑星』と『帰ってきたウサギ』を中心に」、『ソール・ペローともう一人の作家』第8章、日本ソール・ペロー協会編、彩流社、2019年。
- [10] 柏原和子、「死を目前にした作家の心象風景 ジョン・アップダイクの*Endpoint*」、『関西外国語大学研究論集』第114号、2021年、121-138。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 柏原和子	4. 巻 第109号
2. 論文標題 ジョン・アップダイクが描く女性の「老い」－Seek My FaceとThe Widows of Eastwickを中心に－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西外国語大学研究論集	6. 最初と最後の頁 269 - 285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柏原和子	4. 巻 第114号
2. 論文標題 死を目前にした作家の心象風景 ジョン・アップダイクのEndpoint－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西外国語大学研究論集	6. 最初と最後の頁 121-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kazuko Kashihara
2. 発表標題 Establishing a Self: Women's Productive Aging in Seek My Face and The Widows of Eastwick
3. 学会等名 The 5th Biennial John Updike Society Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本ソール・ベロー協会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 344
3. 書名 ソール・ベローともう一人の作家	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------